

保育士養成校におけるキャリア教育の課題
—適性検査の分析を通して—

垂見 直樹 金 俊華 林 幸治

Subjects for the Career Education
for Students in a Course of
Early Childhood Education in Junior College
— From an Analysis of Aptitude Test —

Naoki Tarumi

Junhwa Kim

Kooji Hayashi

Abstract

The purpose of this paper is to explore the desirable way of career education for students in a course of early childhood education in junior college. In this paper, we demonstrate the tendency of the students in a course of early childhood education of Kyushu Junior College of Kinki University. The results are as follows.

First, the students show the tendency of lower motivation toward their work in future.

Secondly, the students show the tendency of higher interest in service for others or social service. The tendency is very important attribute for nursery teachers.

Thirdly, the students show the directivity of 'activity' or 'giving direction for others'.

We have to encounter students in a course of early childhood education in junior college, through career education for reasonable choice of their career. It is necessary for us to develop the method of career education for students' career.

Key words: career education, students in a course of early childhood education in junior college

はじめに

本稿は、著者らの所属する近畿大学九州短期大学保育科の学生を対象に実施している適性検査（SAI：正式名称はSG式総合職業適応検査、以下SAIと表記）の結果を分析し、保育士養成校としてのキャリア教育の課題を再考するものである。2004年度から2010年度入学生のSAIの検査結果から明らかになった学生の幾つかの傾向を分析し、今後のキャリア教育の一つの指標としたい。

1. 「子どもが好きだ」という「原初的体験」

従来から、保育士養成校に入学する学生の中には、保育士に対する憧れや保育士が自分の夢であると語る者が多い。近年、「わたしは、保育士に向いている」という信念を持って入学する学生も目立つ。保育士養成校の短期大学だから当然のことかもしれない。しかし、その信念の根拠は、「わたしは、子どもが好きだから」、「わたしは、子どもの世話が好きだから」、「保育士に憧れているから」という類の感覚的なものである。入試面接の場面でも、実に多くの学生が子どもとの触れあいに関する「原初的体験」を語っている。その殆どが、高校入学以前の体験に基づくものである。このような信念は保育士養成校入学の積極的な動機にはなるが、資格取得及び卒業後の保育現場への就職という一連のキャリアの構築を必ずしも保障するものではない。しかし、この認識が欠如している学生も少なくない。ならば、入学の段階で客観的根拠に裏打ちされた保育士としての「適性」の検証が必要だと、主張しているわけではない。

ここで本田の指摘を紹介してみよう¹⁾。本田は、日本の学校教育現場でキャリア教育がどのように受けとめられているかについて触れ、中学校と高校には温度差があるという。中学校（ベネッセ教育研究開発センター調査）と高校（リクルート調査）との比較によれば、キャリア教育の充実への肯定感が高校より中学校の方が相対的に高いという²⁾。キャリア教育の具体的な活動として中学校では「職場体験」を9割が実施している。一方、高校では「職業人による講演会」、「職場見学」、「就業体験（インターンシップ）」などの実施比率は、それぞれ半数強であり、中学校に比べ、高校でのキャリア教育は焦点が絞り切れていない。また、もうひとつ注目すべきは、高校での進路指導で生徒に伝えていることとして、教員の98.8%が「将来のことや職業のことを考えなさい」と挙げており、「自分のやりたいことや向いていることを探しなさい」や「自分の進路だから自分の責任で決めなさい」もそれぞれ95.8%、85.7%に上がっている。結果、『(前略) 少なくとも高校の段階においては、「キャリア教育」は「自分の将来や、やりたいことを考えて、自分で決めなさい」といった規範や圧力という形で、もっとも浸透していることがうかがえる。(中略) 目標や活動が漠然としていながらも「よきもの」として強力に推進されている「キャリア教育」は、そうした「漠然たるよきもの」を生徒個人が自ら体現しなければならない、という圧力として、教育現場において実体化しているのである』と本田は指摘している。

このような日本の学校教育におけるキャリア教育の現状を考えると、次のようなストーリーが想定できる。高校までの具体的な職場体験などはあるものの、自分のキャリアに対して向き

合う経験と方法が乏しいまま、高校では「自己責任」と「自己決定」で自分の好きな仕事を半ば強制的に選ばざるを得ないということになる。4年制大学に進学する場合は、大学進学後も、所謂「自分探しの旅」が続けられる。しかし、保育士養成校の短期大学に進学を考える場合、遅くとも高校3年生秋の段階で、保育士という職業に自分が向いているか否か何らかの判断に迫られるわけである。その際、「自分が好きなこと＝自分がしたい仕事＝自分の適性」という単純な構図が安易に成立するのである。その際、子どもとの触れ合いに関する「原初的体験」が、進路選択の入り口の段階で新たな意味をもって再生産されるのであろう。

2. 学生の傾向－2004年度から2010年度までのデータ分析－

ここでは、保育士に対する漠然とした信念を持っている学生や保育士に対するに憧れを持っている学生が多いという傾向の他に客観的指標として、本学の入学生の傾向を把握するために2004年度から2010年度までの7カ年に渡り実施したSAIのデータを集計し、その結果を示したものである。以下、本学保育科の学生へのSAIの結果からみえてくるものを整理・分析することで、短期大学入学後のキャリア教育の方法について考察する。

SAIは、質問紙調査法および検査法により実施され、過去の短大生の検査結果を分析し、各スケールについて出現率を割り出している。各スケールの出現率を表1に示す³⁾。

表1 SAIにおける各スケールの出現率

職場適応スケール

段階	1	2	3
	まだまだ	ふつう	よい
出現率	23%	54%	23%

興味スケール

段階	1	2	3	4	5
	低い	やや低い	ふつう	やや高い	高い
出現率	7%	24%	38%	24%	7%

適応態度スケール

段階	1	2	3
	低い	ふつう	高い
出現率	23%	54%	23%

以下、質問紙調査法で測定される「職場適応スケール」、「興味スケール」、「適応態度スケール」の3指標に関する学生の傾向を析出する。その際、各項目の検査結果について、出現率をもとに予測値を導出し、本学学生の検査結果と、SAIを受検した短大生の傾向との検査結果をカイ2乗検定を用いて検定し、有意差の有無を析出した。本稿では、有意水準 α が0.01で有意である場合は、有意差が認められると判断した。

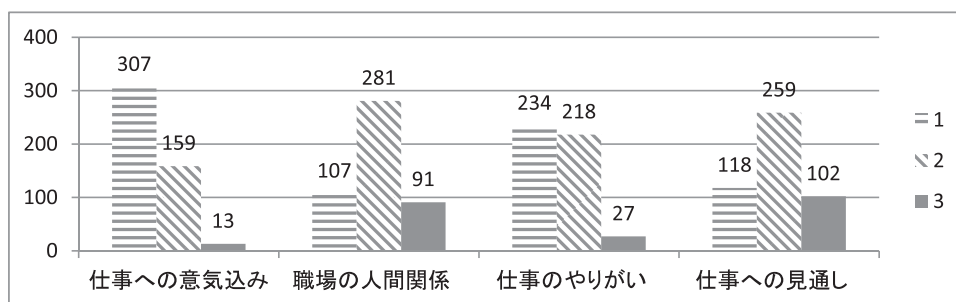
2-1. 「職場適応スケール」にみられる学生の傾向

職場適応スケールとは、「学生が就職して職場で活動する際、うまく職場や職業に適応して

いくための条件がどのようなものであるかの様相」を明らかにしたものである。職場適応スケールでは、「仕事への意気込み」「職場の人間関係」「仕事のやりがい」「仕事への見通し」の4項目について9項目ずつ計36項目で測定される。回答は質問に対して「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法による。各項目で測定される内容は以下のように説明されている。

「仕事への意気込み」は、「仕事に対して、意欲的、積極的に取り組もうとするのか、簡単な仕事に楽に従事しようとするのかの姿勢をみるもの」、「職場の人間関係」は、「職場内での人間関係を円滑に保てる傾向にあるか、独立して仕事を進める方が向いているのかの程度をみるもの」、「仕事のやりがい」は、「仕事自体に面白さを感じ、充実感を味わうことができるタイプなのか、仕事以外の生活で充実感を味わう傾向にあるのかの程度をみるもの」、「仕事への見通し」は、「長く仕事を続けていくことを念頭において自分の将来像を考えているのか、とりあえず就職してみようという姿勢なのかをみるもの」である。以上4項目における測定結果が表2である。

表2 職業適応スケール



また、職業適応スケールにおけるカイ2乗検定の結果が表3である。

表3 検定の結果（職業適応スケール）

項目	検定
仕事への意気込み	*
職場の人間関係	n.s.
仕事のやりがい	*
仕事への見通し	n.s.

n.s.:非有意, *:p<0.01

カイ2乗検定の結果、「職場の人間関係」「仕事への見通し」の2項目についてはいずれも有意差が認められなかったが、「仕事への意気込み」「仕事のやりがい」の2項目については、著しい有意差が認められた ($p<0.01$)。そして表2から明らかなように、本学学生の傾向としては、低い得点を示す方向に偏りがみられる。

これら2項目は、「仕事に対して、意欲的、積極的に取り組もうとするのか、簡単な仕事に楽に従事しようとするのかの姿勢」、「仕事自体に面白さを感じ、充実感を味わうことができる

タイプなのか、仕事以外の生活で充実感を味わう傾向にあるのかの程度」であり、共に仕事への意欲に関する項目である。本学学生は相対的に「簡単な仕事に楽に従事しようとする」傾向、「仕事以外の生活で充実感を味わう」傾向にあることがわかる。しかし、「長く仕事を続けていくことを念頭において自分の将来像を考えているのか、とりあえず就職してみようという姿勢なのか」をみる「仕事への見通し」の項目では平均的な分布を示していることから、「長く仕事を続けていくこと」への意識が低いわけではない。

本学保育科の多くの学生は保育職（保育士・幼稚園教諭のほか、施設保育士や学童保育指導員なども含む）に就職することを希望しており、事実およそ90%の学生が保育職に就職していく。このことを踏まえれば、保育職を漠然と自分の仕事にしようという意思はあるものの、より一般的な意味合いにおける「仕事・労働」それ自体に対する意欲が相対的に低いと推測することができる。

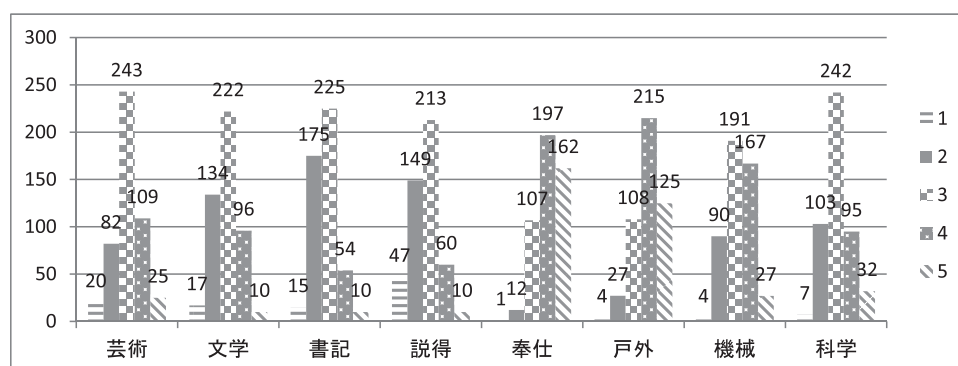
また、本学では例年、1学年後期にSAIを実施している。1学年後期は、本学に隣接する附属幼稚園への実習が開始されて間もない時期であり、まだ外部の幼稚園実習や保育実習等は経験していない。この時期、学生たちがもっていた保育への漠然としたイメージが、保育現場の実態や現実の子どもとの接触を通して、加熱あるいは冷却されはじめる。言い換えれば、この時期以降「原初的体験」の強化（やはり自分は保育者になりたい）あるいは再検討（実は保育者に向いていないのではないか）というように保育職への動機づけが再構築される。検査時期を考えれば、職業選択の動機づけとしての「子どもが好き」といった漠然とした信念が、より具体的な形を帯びて意識されるには至っていない段階であるということもできるだろう。また、保育職を漠然と志望してはいても、保育職に内在する職業的価値を見出すことができていないともいえる。

2-2. 「興味スケール」にみられる学生の傾向

「興味スケール」では、「芸術」「文学」「書記」「説得」「奉仕」「戸外」「機械」「科学」の8項目について、63項目で測定される。回答は質問に対して「好き」「どちらでもない」「嫌い」の3件法による。8領域それぞれについて、1点から5点までの5段階に換算される。各項目で測定される内容は以下のように説明されている。「芸術」は、「絵画、音楽、工芸、建築など、創造的な仕事に対する興味の因子からなる領域」、「文学」は、「文章を書いたり読んだりする仕事に対する興味の因子からなる領域」、「書記」は、「こまごまとして正確さを必要とする事務的仕事や、数を取り扱う仕事に対する興味の因子からなる領域」、「説得」は、「いろいろな人と面接したり、お客と取り引きしたり、商品の販売や販売計画の立案などの仕事に対する興味の因子からなる領域」、「奉仕」は、「人々のための奉仕や援助などの仕事に対する興味の因子からなる領域」、「戸外」は、「大部分が戸外で行わなければならない仕事、農業、水産など、自然を対象とする仕事に対する興味の因子からなる領域」、「機械」は、「物、工具、機械などの操作に関連した仕事に対する興味の因子からなる領域」、「科学」は、「主に、自然科学の範囲において、新しい事実を発見したり、問題を解決したりする仕事に対する領域」である。

以上 8 項目における測定結果が表 4 である。

表 4 興味スケール



また、興味スケールにおけるカイ 2 乗検定の結果が表 5 である。

表 5 検定の結果（興味スケール）

項目	検定
芸術	*
文学	*
書記	*
説得	*
奉仕	*
戸外	*
機械	*
科学	*

n.s.:非有意, *:p<0.01

興味スケール 8 項目のうち、すべての項目において有意差が認められた。しかし、表 2-1 に示す通り、その分布の仕方は項目によって異なる。1 点から 5 点までの分布をみると、たとえば「芸術」では 3 点が突出して多く低得点と高得点の比に偏りは認められないのに対し、「書記」「説得」では明確に低得点への偏りが認められる。そのように表 2-1 をみれば、高得点への偏りがみられる項目として「奉仕」「戸外」を挙げることができる。

「奉仕」は、「人々のための奉仕や援助などの仕事に対する興味の因子」からなり、「戸外」は、「大部分が戸外で行わなければならない仕事、農業、水産など、自然を対象とする仕事に対する興味の因子」からなる。本学学生においては、「人々のための奉仕や援助」「自然を対象とする仕事」に高い適性を示す傾向にあることがわかる。

保育職においては、これら 2 項目に対する適性の高さは大変重要である。保育・教育・福祉や医療等における「ヒューマン・サービス」に関わる業種において、それらの職業に従事する者が「他者のため」という性向を有することが望ましいことは容易に了解できることである。

特に保育職においては、保育者は子どもとの愛着を伴う基本的信頼関係を構築することが期待される。そのような関係性は、子どもの健全な心身の発達にとって重要であることは言うまでもない。また、保育者には「子どもの成長・発達を支える」という社会的責任がある。子どもとの関係性の構築の前提として、あるいは社会的役割を遂行する動機づけの源泉として、奉仕への志向性は重要である。

阿部（2007）は、介護職等の若者の労働の実態を明らかにし、若者が「やりがい」をもって労働に従事するも、待遇は必ずしも良好とはいえず、最後には「燃え尽きて」となると報告している⁴⁾。介護職等は若者の「善意」を搾取することで成立している側面があると考えられることができる。保育職に関しても、しばしばその待遇の悪さが指摘されるが、こうした奉仕の精神をもった若者たちが多く従事するという点では共通点がある。保育職もそうした多くの若者たちによって支えられており、待遇の改善等の制度的課題にも目を向ける必要がある。

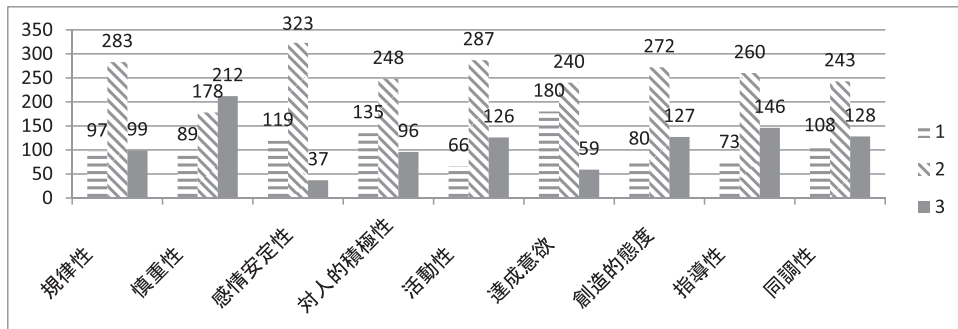
「戸外」の項目が高いのも注目に値する。保育では外遊びが推進され、小学校以降も自然体験学習が重視される趨勢の中で、自然への興味を保育者自身が有することは重要な資質である。近年、携帯型ゲーム機等の普及により子どもの遊びが「個人化」し、都市化により子どもの居場所が消失あるいは変容する中で、仲間集団での外遊びの減少が懸念される。保育現場にはそのような体験を補完的に準備することが求められる。これらの点から、「戸外」への興味の高さも保育者の資質として重要である。

2-3. 「適応態度スケール」にみられる学生の傾向

「適応態度スケール」では、「規律性」「慎重性」「感情安定性」「対人的積極性」「活動性」「達成意欲」「創造的態度」「指導性」「同調性」の9領域について、63項目で測定される。回答は質問に対して「はい」「いいえ」の2件法による。各項目で測定される内容は以下のように説明されている。

「規律性」は、「日常の規律を自覚し、守っていく態度、道徳意識、起立意識の強さをみるもの」、「慎重性」は、「冷静に、注意深くものごとを考え実行していく態度や分析的、思考的態度をみるもの」、「感情安定性」は、「感情的にならず、落ち着いて行動する態度、冷静さ、自己を抑制する態度、感情面、情緒面の安定性などをみるもの」、「対人的積極性」は、「人前でも臆さず、積極的に行動する態度、統率力、説得力、社交的態度などをみるもの」、「活動性」は、「積極的にエネルギッシュに物事に打ち込んでいく態度、活動力、元気のよさなどをみるもの」、「達成意欲」は、「目標達成を目指して意欲的に努力していく態度、やる気、向上力などをみるもの」、「創造的態度」は、「創造的、意欲的態度、新しいことに興味を示し、実践していく態度、進取の気性などをみるもの」、「指導性」は、「指導力があり、人の先に立って積極的に行動する姿勢やリーダーシップがあり、集団をリードすることができるかどうかをみるもの」、「同調性」は、「他人を受け入れ、協調していく態度、素直さ、従順さなどをみるもの」である。以上9項目における測定結果が表6である。

表 6 適応態度スケール



また、適応態度スケールにおけるカイ 2 乗検定の結果が表 7 である。

表 7 検定の結果（適応態度スケール）

項目	検定
規律性	n.s.
慎重性	*
感情安定性	*
対人的積極性	n.s.
活動性	*
達成意欲	*
創造的態度	*
指導性	*
同調性	n.s.

n.s.:非有意, *:p<0.01

適応態度スケール 9 項目のうち、「規律性」「対人的積極性」「同調性」を除き、その他の項目において有意差が認められた。しかし、表 3-1 に示す通り、その分布の仕方は項目によって異なる。顕著な特徴が認められる項目のうち、ポジティブな偏りがみられる項目として「慎重性」「活動性」「指導性」が挙げられる。また、ネガティブな偏りがみられる項目としては、「感情安定性」「達成意欲」が挙げられる。

3. 適性の有無のデータ

SAI では、幼稚園教諭・保育士に対し職業適性を有するかどうかの判定がなされる。適性検査受検者のうち、適性あり群と適性なし群に分け、どのような差異を示しているかを示す。この判定は、「興味スケール、職場適応スケール、能力スケールの結果と、それらを総合した結果をもとに出力している」とされており、「興味スケール」「職場適応スケール」における差異について概観したい。

興味スケールにおいては、「奉仕」の項目において適性あり群によりポジティブな偏りがみられた。その他の項目については明確な差異は見出すことができなかった。

適応態度スケールにおいては、各項目で差異を示している。表 8、表 9 はそれぞれ、適性あ

り群の適応態度スケール、適性なし群の適応態度スケールである。

表 8 適性あり群における適応態度スケール

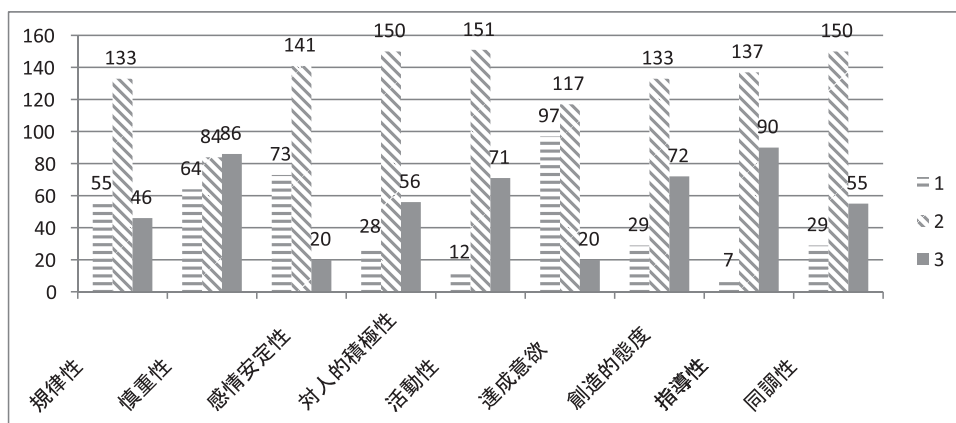
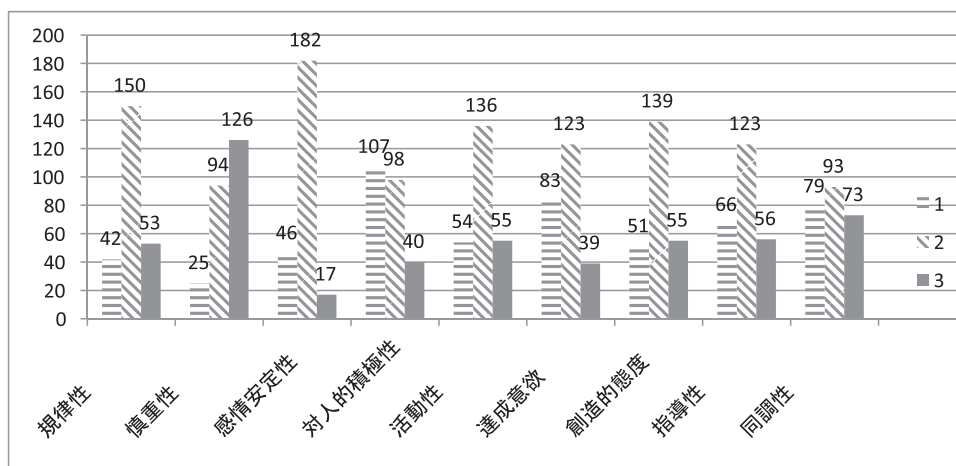


表 9 適性なし群における適応態度スケール



特に偏りの差異を示す項目として、「慎重性」「対人的積極性」「活動性」「指導性」を挙げることができる。

「慎重性」については、適性なし群においてポジティブな偏りを示している。

「対人的積極性」については、適性あり群がポジティブな偏りを示すのに対し、適性なし群においてはネガティブな偏りを示している。

「活動性」については、適性あり群において相対的にポジティブな偏りを示している。

「指導性」については、適性あり群において明確にポジティブな偏りを示している。

これらの結果をもとに適性の有無が判定されており、これらの結果をどのようにキャリア教育に反映させるかが重要である。すでに述べたように、およそ 90 % の学生が保育関連職に就

職していく現状を考えれば、「適性なし群」の学生に対して、対人的積極性や指導性の向上を促すことも考えられる。

4. 結論—保育士養成校のキャリア教育の課題

ここまで、本学学生の SAI の結果を概観してきた。その結果を踏まえ、保育士養成校におけるキャリア教育を展望し、結びとしたい。

保育業界の実態、資格制度、労働環境などに柔軟に適応するために保育現場の「現実」を具体的にイメージできる、実感できる指導をさらに強化する必要がある。

本学で毎年実施している SAI においては、保育士としての適性の有無と就職結果の相関は認められないという結果をすでに報告している⁵⁾。だから、誰もが保育士になれるということではない。乱暴な言い方をすれば、保育士という職業に対する漠然とした信念や憧れを抱いている学生が保育士養成校の生活世界の「現実」に適応できないまま挫折するか、「現実」に適応するために努力し克服するかの両者択一の世界が目の前に繰り広げられているという事実を認識させるべきである。換言すれば、「自分が好きなこと＝自分がしたい仕事＝自分の適性」という構図は必ずしも成立しないということを学生に自覚させる、ということをキャリア教育の最優先課題として取り組むべきである。

また、学生の保育士に対する素質を、キャリア教育を通して具体的な職業意識へ転化することが必要である。保育者を目指している学生たちは、興味スケールにおける「奉仕」の項目の得点の高さからもわかる通り、保育者としての資質を備えているということができる。学生の「奉仕」への欲求が、保育関連職においてどのように結実するのかを具体的に示すこと、子どもの成長の過程に携わることへの意欲をかき立て、保育関連職が社会にどのような貢献をしているかについて目にみえる形で示す必要があるだろう。「夢」や「憧れ」への駆り立てもしくは強要より、具体的に職業として成立させるために何が必要か十分な検討が必要である。

以上の内容を具体的にプログラム化し、キャリア教育を通して、保育士としての「仕事の内容」にコミットメントできる態度を育てる必要がある。単に子どもが好きというより、子どもの発達を援助するために自分はどのような知識と技術を身につけたかという具体的な「事実」の積み重ねと検証が重要である。

また、保育士、幼稚園教諭免許の取得をめざし、希望する進路（保育職への就職）が明確な学生も、実は職業への意欲が高くないことは、本学への入学が積極的選択ではない学生が多いということを示唆している。事実先行研究において、積極的に保育士養成校に進学した少数の「積極進学群」だけが学習の動機づけが高い事実が指摘されている⁶⁾。キャリア教育は進路形成・就職に対してのみならず、在学中の日々の学習への動機づけを高める役割も期待されるであろう。

【註】

- 1) 本田由紀（2009）『教育の職業的意義－若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房
- 2) リクルート（2009）『キャリアガイダンス』No.25
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentakaku/2005/index.html>
- 3) 「SG 式総合職業適応検査 SAI マニュアル」参照
- 4) 阿部真大（2007）『働きすぎる若者たち—自分探しの果てに—』生活人新書
- 5) 金 俊華・林 幸治・緒方章嗣（2009）「保育士養成校におけるキャリア教育—適性検査と就職動向との関連について」『近畿大学九州短期大学紀要』第 38 号 39-47 頁
- 6) 神谷哲司（2010）「保育系短期大学生の進学理由による保育者効力感の縦断的变化」『保育学研究』48（2）192-201 頁